様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 06 月 10 日現在

機関番号：32682
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：22520375
研究課題名　先住民族とは誰か――グローバル化世界における先住民族と日本人の比較文学的再考
研究課題名（英文）　Who are “Senjumin”?: A New Perspective for Indigenous Peoples and Japanese in the Globalizing World from the viewpoint of Comparative Literature Studies
研究代表者
中村　和恵（NAKAMURA　KAZUE）
明治大学・法学部・教授
研究者番号：00268476

研究成果の概要（和文）：
先住民族とは誰かと問うことは、文明、民族、進化といった概念、さらに欧米中心主義と近代日本人の民族観の複雑な関係の再検討でもあった。方法としては現地調査と文学テキスト分析の両方を用いて具体的な個人の声を重視し、カリブ居留地とジーン・リースのカリブおよび日本人描写、オーストラリア先住民の「秘密の聖物」出版・展示に関する論争、アイヌ文化の現在ほか、インド、タヒチ、マルティニーク、エストニア等でも調査研究を行った。

研究成果の概要（英文）：
Who are "Senjumin"? Can this Japanese term be regarded as equal to "indigenous peoples" in, for example, the United Nations Declaration on the Rights of Indigenous Peoples? To answer this question, one has to reconsider the concepts such as civilization, nation/ethnic group, progress, and the complexity of modern Japanese ideas of race and ethnicity under the strong but not complete influence of Eurocentric view of the world. Using both field research and analysis of literary text, this research project was carried out focusing on each individual voices instead of inclining to abstract discussion of theoretical concepts: interviews in Carib Territory and works of Jean Rhys with both Caribs and Japanese, interviews in Australian Aboriginal communities and debates over their "secret sacred objects," Present Ainu cultural heritage, as well as researches in India, Tahiti, Martinique and Estonia were referred to, in an attempt to accumulate useful evidences for the political and temporarily nature of the concept of absolute Others.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1500,000	450,000	1950,000
２０１１年度	1000,000	300,000	1300,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
総　計	3000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学，各国文学・文学論
キーワード：比較文学・文化人類学・英語圏文学・先住民族・ポストコロニアリズム

１．研究開始当初の背景

国連、各国政府、自治体等がそれぞれの必要により定義を示してはいるものの、先住民と呼ばれる人々について時代や状況に左右されない絶対的な定義を示すことは実際、不可能だ。多くの文化人類学者や文化論研究者が認めるとおり、「先住民族」は政治的な概念である。2007年に先住民族の権利に関する国際連合宣言が採択され、日本もこれに賛同の一票を投じ、翌2008年には国会で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が全員一致で採択された。しかしこうした決議の根底にあるはずの「固有の文化」の理解・解釈は大いに錯綜している。日本国内の先住民族人口さえいまだに明確にすることは難しい現状で、なにを指標として「彼ら」は把握されうるのか、厳密には不明なのだ。

文化の内実からみた先住民族の輪郭の見定めがたさを棚上げして為政者が彼らに名前を与え処遇を定めるという錯綜は、日本だけのものではなく、新しいものでもない。「先住民」対「主流派住民」という二項対立そのものが、人種という概念を軸に文明と野蛮を分断する物語のヴァリエーションでしかないことは、二十世紀前半のエヴァンス=プリチャード『アザンデ人の世界』、さらに遡って十六世紀に書かれたラス・カサス『インディアス文明誌』にさえすでに明らかである。数多くの近年の文化人類学的研究も、先住民族が多くの人々が信じるほど伝統的でもなければ孤立した文化の内に団結しているわけでもないことを、古今数多くの悲喜劇を通じて立証している。にもかかわらず、多くの人が、肯定的にせよ否定的にせよ、先住民と呼ばれる人々を「われわれ」とは本質的に異なる者、厳然たる他者と信じつづけている。

エドワード・サイードのオリエンタリズム批判やベネディクト・アンダーソンのネイションという幻影の指摘にも揺らぐことなく人々に支持されつづけるこのような「先住民」観から生じた偏見・嫌悪感・憧憬は、社会学の研究成果よりむしろ文学作品の中にこそ豊富に、しかも手に入りやすく確認しやすいかたちで示されている。これまでも先住民という概念の分析と、彼らについて語るとき必ず迫られるこの概念に対する倫理的姿勢の選択という問題については、旧植民地地域を中心とする各地の文学者と文学研究が優れた成果を示してきた。だが多くの場合それは各国・各地域文学の枠内で個別に考察され、先住民とは誰なのかという問いに国を越えて答えるものとして考慮されることはほぼなかった。これまで旧英国植民地を中心に地域横断型の比較文学・文化研究をつづけてきた当課題研究代表者は、先住民族に関する広義の「物語」を、地域を越えるかたちで比較検討することで、これまでにない先住民論が展開できると考えるにいたった。

２．研究の目的

先住民族とは誰のことを、あるいはどんな生活や状況のことを指すのか、その定義は誰によってつくられ、先住民族と呼ばれる人々自身はこの定義をどう受けとめているのか。文化人類学や政治学ではなく比較文学研究の分野で、異なる立場から「物語る」広義の文学（小説、詩、口承文芸、歴

史記述、紀行文、インタヴュー）を比較・検証し、この主題に取り組む。英語圏を中心とする幅広い地域の先住民族表象を対象に、日本人研究者であるからこそ可能な視点を活用して、植民地支配から文化遺産保護運動にいたる多様な「グローバリズム」の影響下で「問題」としての先住民族がどのように形成されてきたのか、どのような視点により「問題」ではなく「彼ら」について語ることが可能になるのか、という問いに対し具体的な回答例を示すことを目的とする。

一九八〇年代に活発化した先住民ほかさまざまな立場のマイノリティによる既存の学術世界への批判は、「彼ら」を研究・観察･描写の対象としてきた学問領域の根本を問いただすものであり、いまや透明で普遍的な観察する目として対象に向かうというスタンスが不可能であると感じるようになった研究者たちは、自身も観察の対象にひっくるめた個人的な「物語」を語るという姿勢を示すようになった。保苅実がオーストラリア先住民史研究で試みた「ラディカル･オーラル･ヒストリー」のスタイルは日本におけるその好例であったといえよう。サモア、フィジー、トンガ、ニュージーランドなど南太平洋地域やオーストラリア先住民居留区における現地調査で、またテキストの上でも英語圏旧植民地のエスニック･マイノリティに出会うなかで、応募者もまた自らの立つ位置を常に意識させられる経験をした。本研究ではこの経験から、グローバル化／ユーロアメリカ化をつづける世界における先住民族の定義を、国外から日本人に向けられる視線により相対化することで、見るものと見られるものを固定することなく考え直し、さらには日本人の位置そのものも問い直すことに挑戦したい。これは植民地主義を問題にする日本の外国文学・文化研究者として不可避な自問から生じた根源的な主題である。

３．研究の方法

方法は大きく分けて、(1)現地調査（フィールド調査、現地資料閲覧、面談等）と、(2)文学テキスト等すでに公開されているテキストの分析研究、に二分される。

(1) 主な現地調査の概略

①南インド・カルナータカ州における調査
②カリブ海先住民とくにドミニカ島における調査
③フランス海外県であるマルティニークおよびタヒチにおける調査
④オーストラリア先住民コミュニティにおける調査
⑤オーストラリア先住民関連研究施設における調査
⑥エストニアにおける調査と研究交流
⑦北海道におけるアイヌおよび他の北方先住民族に関する調査
⑧イギリスおよびフランスにおける現地資料・原稿資料などの調査

(2) 主なテキスト分析

①日本人および先住民族の文学を中心とする表象の実例およびそれらに関する先行研究と研究交流
②カリブ海および南米を中心にアメリカス（合衆国に限定されないアメリカ大陸全体）の先住民に関する言説の追跡
③現代アボリジニの「物語」に関する人類学的・言語学的研究の読解
④日本における北方先住民の「物語」に関する人類学的・言語学的研究の読解

こうした方法で得られた知見をオーストラリア・モナッシュ大学でのセミナーや学

会等での口頭発表、日本の新聞、雑誌等への寄稿や論文、著書に発表した。

４．研究成果

(1) 当研究の国内外における現在の位置づけと意義

民族、人種、国、倫理といった、異文化間交渉の際に必ず問題になる基礎概念が、いまだに西欧中心的な視野から脱していないのではないか、という批判的視点がこの研究課題の出発点であり、この問題意識は現在ひろく世界で共有されている。旧植民地諸地域においてはこの意識は自国文化の根幹に関わる問題であり、旧宗主国の学問世界においては自国文化のみならず「文明」という概念の見直し・反省を迫り近代化そのものを問い直す重大な主題である。先住諸民族の伝統文化の現状にこの実例をもとめることは、国際的には正統的で時代思潮と歩調を合わせた文化研究の立場ということができるだろう。

しかし当研究の新しさは、こうした根元的な問いを日本人が問うときに生じる根源的な矛盾を、理念的な分析ではなく、１人の研究者による複数地域を横断するかたちでの実践的フィールドワークと、テキスト上における具体例の調査・比較研究、この両面から行った点にある。これは生きて生活しておられる先住民族の方々の現在と、かれらについての、またかれら自身によるテキストをつきあわせ、それを分析するわたしという日本人の視線を相対化することで、現在じつは選択的に選び取っている自らの文化的ポジションを浮かび上がらせる探求であった。

(2) 主要な成果

①ドミニカ島の先住民族カリブの居留地調査、同島出身の作家ジーン・リースのカリブと日本人が並置された小品の分析。排斥されたがゆえに偏りのないクレオール白人作家の目に映った「文化的純粋性」「エキゾティシズム」の欺瞞性を裏づけた。
②フランス海外県（タヒチとマルティニーク）の住民や作家へのインタヴューと、フランスのケ・ブランリー博物館とルーヴル博物館の先住民関連展示分析、両者の対比。フランスの文化政策および海外領土政策の内に現在も色濃く残る文化帝国としての自負と被支配民たちの政治的独立＝文化的自立という幻想からの乖離、同時にあらたなかたちの文化運動の存在を確認した。
③南インド・マイソール大学における文学研究者たちとの意見交換から、インドの知識層とアファーマティヴ・アクションによる被支配層の大学内における存在感の齟齬、対日本意識、英語文学と地方語の力関係について情報を集める。被支配層の先住民族としての位置づけについて再確認した。
④西インド大学トリニダード校、ロンドン大学東洋アフリカ研究所、ケンブリッジ大学図書館および大英図書館にてでの植民地行政官ヘスケス・ベル関連一次資料調査、植民地行政の一端を辿り英領ドミニカ植民地（現ドミニカ国）に残ったカリブ植民地の政治的背景と土地所有者たちの係争について知る。
⑤オーストラリア先住民に関し、ユエンドゥム・アート・センター、ストレロー研究センターほかオーストラリア国内の図書館や子文書館でのフィールド調査や研究者らとの意見交換、Ｔ・Ｇ・Ｈ・ストレローの聖／秘物蒐集をめぐる論争資料調査を通じ、異文化としての先住民族の「秘密」に現在いかに研究所・研究機関が対応しているか、

先住民族の方々の側からは「秘密」保持にどのような労力を割くのが妥当と考えているか情報を集める。
⑥ヨーロッパ北方の先住民族についてエストニア共和国で資料や情報を得る。ヨーロッパにおける「先住民族」の定義について北方の視点から考える。
⑦アイヌ民族を中心に日本の北方先住民族に関する先行研究の参照と新しい研究動向の調査、アイヌ文化継承者や若い世代の新しい文化的表現者たちへのインタヴュー、先行研究に関し知識を得る。
⑧上記の成果を国外研究機関におけるセミナー、学会発表、雑誌連載エッセイ、論文、一般向け図書等にて紹介した。

(3) 今後の展望

国内外で集めた膨大な資料の整理・分析作業に時間がかかり、まだまだ研究成果を紹介しきれていない。研究ノートのブログを通じた発表、研究書の刊行等を今後もつづけ、この研究課題にとりくむことで得られた多くの知見をアカデミアを越えて共有できるよう尽力をつづける。先住民族の立場を日本人として再考することは今後人文科学だけでなくきわめて広い範囲で（そこには土地の利用権や資源採掘の問題、国境の問題も含まれる）ますます重要になるとおもわれ、その際の基本理念を机上の空論ではなく具体的な個人の存在から考えた実例はかならずや重視されるべきものとおもわれる。理解がひろく得られるようになるまで、この研究課題の成果をさまざまな方法と形式により繰り返し紹介しつづけていく所存である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）
①中村和恵、もうひとつの結末――Jean Rhys *Voyage in the Dark* 最終章のヴァリアント、いすみあ（明治大学教養デザイン研究科紀要）５号、査読有り、2013 年、pp.180-251
②中村和恵、野蛮人と物差し、世界（岩波書店）2011 年９月号（821 号）、査読無し、2011 年、pp. 247-254

〔学会発表〕（計４件）
①中村和恵、Dislocation という立場から――Jean Rhys のカリブ海、イギリス、日本、第 74 回全国大会、シンポジウム「比較植民地文学の射程―「引揚者」の文学を開く―」、大正大学　2012 年６月 10 日
②NAKAMURA KAZUE, “Caribs and Japanese: Jean Rhys’s Others in “Vienne” and “Temps Perdi,” Australian Association for Caribbean Studies Biennial Conference, WEA Newcastle, Australia 2011 年２月 18 日

〔図書〕（計１件）
中村和恵『地上の飯』平凡社、2012 年、全 192 頁

〔その他〕
①当該研究の一般向け紹介記事４本（「フチのたまわく（アイヌ文化入門）」『日経新聞』2012 年８月 27 日夕刊、ほか）
②研究内容の一端を紹介するブログ http://djonm.at.webry.info/201103/article_1.html

６．研究組織

(1)研究代表者

中村　和恵（NAKAMURA　KAZUE）

明治大学・法学部・教授

研究者番号：00268476

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：